信徒発見１５０周年記念劇

長崎公演（ブリックホール）

そして サンタ・マリアがいた

―キリシタン復活物語―

脚本　古 巣　馨

―― 一　幕 （三場）――

浦上教会の鐘の音が鳴り始めて、10 秒後に緞帳が上がる。鐘の音が終わると、紗幕に映像が映し出され、ナレーションが始まる。

ナレーション①

わたしの祖母カタリナ杉本ヤスは、１９６２年４月７日、ロザリオを握りしめたまま、静かに天に帰って逝きました。枕元にはサンタマリアのご像が見守っていました。94 歳でした。１８６８年に井手弥四郎とナカの子として生まれ、その２年後、まだ２歳にもならないヤスは、家族と一緒に和歌山に流されたあげく、旅から帰ってきた人でした。17 歳の時には原爆にも遭い、顔中に刻まれた深いしわが、人には言えない難儀な人生を語っていました。それでも、94 歳まで生かしてもらったのは、神様からあてがわれた役割があったのでしょう。ヤスは、信徒発見と旅の時代を生き延びた最後の人でした。ときの主任司祭 中島萬利神父様は、浦上教会挙げて、ヤスの野辺の送りをしてくださいました。「名もない、何のとりえもない貧しい人が、神様のことを一番よく知っています」と、萬利神父様は涙ぐみながら、美しい説教をされました。

これからお話しすることは、祖母杉本ヤスがわたしの幼いころから、繰り返し、繰り返し伝えてくれ

て、そうして、受けたものです。わたしも老い先短くなりました。受けた大切なものを、きちんと手渡さなければ、安心して死ねません。どうか、受け取ってください。

ナレーションが終わると紗幕が上がり、踏絵の場面に照明が入る。

―第一場―

登場人物

・ 一本木の新吉

・ 役人（１）　新右衛門

・ 役人（２）　徳之進

・ 役人（３）　馬之助

・ 登立のサト

舞台中央で、役人三人により踏絵が行われている。その場面だけに照明。

帳面と筆を持った役人(１)が名前を呼ぶ

新右衛門　つぎー、一本木の新吉。

新吉　へーい（足を引きずりながら下手より入ってくる。）お役人様、あけましておめでとうございます。毎年、ご苦労さんでございます。

徳之進　うん

新吉　今年ん冬は寒さのひどうございますな。そんせいで、あかぎれのひどうして、こら、こんざまですたい（包帯を巻いた引きずっている足首を見せる)。

新右衛門　（ゆっくり構える新吉に苛立って）つべこべ言わんで、早よう、踏まんか、貴さん。

新吉　へい、へい、ちっと当たっただけで痛とうして…。(新吉は足を引きずって、踏絵の角にそっと足をそえる）あ痛たぁ、たぁ、たぁ…（よろけたまま、去ろうとする）

馬之助　（身を屈めて、斜めから監視する役人馬之助はとっさに）こらっ、こらっ、ちと待て、新吉。

新吉　へい？

徳之進　お前それでほんなこて、踏んだとか。

新吉　はい、今踏みましたでございます……。

徳之進　板の角ばちっーと、足でなでただけたいね。俺の目は節穴か、こらっ。お前は正月そうそう俺ば、おちょくっとか。

新吉　そぎゃんこつは……。

徳之進　（とっさに表情を変え、膝をポンと叩いて）はあー、さては、もしかしたらお前はキリシタンか？一本木の新吉、白状せーい。

新吉　（土下座して）めっそうもございません。

馬之助　徳之進殿、「キリシタン」などと、声の太かですぞな。

徳之進　ん？

馬之助　ここは、もう一度きちんと踏ませて、よく吟味しないことには。先の、天草のごとなったら、目も当てられませんぞ。

徳之進　馬之助殿。

新右衛門　（新吉に）立たぬか。

新吉　あ、へい。

（新吉、新右衛門に促され、元の位置に戻る）

馬之助　天草には４千人のキリシタンが潜んでいるとの噂が立って、島原藩は６年間もかけてしらみつぶし

に調べたあげたそうではござらんか。

徳之進　しかし結局、異宗勘違いということで……。

馬之助　左様、それで島原藩は事なきを得たそうですが、ここはキリシタン奉行のおひざ元。天草どころの騒ぎでは済まされませんぞ。我々も、責任をとって詰め腹を切らされることとなれば。

徳之進　あのなぁ、馬之助殿。

馬之助　ああ、年端もいかぬ息子や娘、その子を女手一つで育てて行く妻の先行きを思えば……はぁあ（大きなため息をつきながら）今更ながら、武士の家になどに生まれるべきではなかった。とほっほっほっ…（泣き崩れる）。

徳之進　なんだ、そのいのちの腐るようなため息は。あのなぁ馬之助殿、前から一度はお主に進言しようと思っておったのじゃが、なぜ、そんなに物事を大袈裟に、しかも悲観的にふくらませる。お主の悪い病ですぞ。馬之助殿。そうは思いませぬか、新右衛門殿。

新右衛門　まぁ徳之進殿。

徳之進　こないだだって、拙者と一緒にそばを食べていたら、たまたま箸が折れたとき、馬之助殿はなんと言うたと思う。

新右衛門　はて？

徳之進　「あぁ、箸が折れてしまった。なにか不吉な前兆か。はっ！もしやいつも通る橋が崩れて死ぬかも知れぬ。用心のため、橋のないところを帰らねば」と、おぬし、昼から暇を取って、本当に遠回りして帰ったろ。

新吉　はっはっはっ（大げさに笑い、役人と目を合わせて、あわてて下を向く）

徳之進　お主は、いったいどこで安堵するのだ。

馬之助　いや、それは……。

新吉　あのおー、お取込み中、誠に失礼ですが、おいはつったったままここにおるとばって、もう、帰ってもよろしいですかの？（と言って新吉、一礼して去ろうとする）

新右衛門　ちと待てい、新吉。元はといえば、お前が紛らわしい踏み方をするから、馬之助殿に火の粉が飛んだのだぞ。あかぎれかなんか知らんが、もう一度、足の裏全部をつけて、踏絵を踏まぬか。

徳之進　左様、手間を取らせおって。

新吉　へい、お言葉どおりにいたしましょう。

新右衛門　あぁ、それにしても因果な仕事よの。もう２５０年間も、毎年正月に踏絵を踏ませて、宗門改めは行うし、一人残らず、最寄りのお寺の檀家にならんといかん。

徳之進　まあ、それもこれもみんなキリシタンを根絶やしにするためだったということであろう。

新右衛門　うん、それはそれとしてよくわかるが、もう、２５０年も経っておる。とっくの昔に、この国にはキリシタンなど一人もおらぬのに、お上もいつまでこんなことをさせるのやら。正月 15 日まで、踏絵を踏むやからの足の裏を、日がな一日眺める拙者たちの身にもなってくれたらのう。

馬之助　新右衛門殿の気持ちは拙者とて同じでござる。しかし、キリシタンがもうこの国にいないということは断言できませぬぞ。

新右衛門　めっそうもない、馬之助殿ぞ:

馬之助　いつのことか忘れもうしたが、キリシタンどもが大切に隠し持っていた書き物の中に、「人からのものなら、時間がたてば自然に滅びるが、神からのものなら、どんなに人が逆らっても滅びることはない」という言葉があると聞き申した。

新右衛門　うん、拙者も聞いたことはあるが、それが？

馬之助　キリシタンの教えが、本当に神からのものなら、キリシタンはまだどこかに生きておって、我々は、その神に必死で逆らっていることになりますぞ。このやからは、オナジことを伝えるのに、たけておると言うからの。

徳之進　いい加減にせぬか、馬之助殿。それがお主の病だと、先ほど言うたばかりであろう。なるほど、お主の言う通り、万が一にもそのようなことがあれば、拙者も潔く降参して、オナジことを信じてキ

リシタンになるしかあるまい。

新右衛門　正気でござるか、徳之進殿。

徳之進　なぁんの、２５０年もなかったことじゃ。心配には及ばぬ。

新右衛門　そうでござったな。

徳之進　それより、新吉、早う踏まぬか！

新吉　へ、へい！（こっそり）あぁーつらしかなぁ…。

徳之進　なぬ?:

新吉　いえ、そいじゃ。（今度は、ゆっくり、踏絵を踏むと、踏絵に向かって、手を合わせて深々と身をかがめてお辞儀する）これで、よろしゅうございますか？

新右衛門　よし、それでよーし。今年もご苦労じゃった。

（新吉、一礼して去る。）

新右衛門　次っ。登立のサト。

登立のサト　はーい。（下手より登場）

新吉が上手に消え、サトが踏絵を踏んで５秒後に暗転で、紗幕が下がる。紗幕が下りると同時に、「こんちりさん」の祈りが流れる（約 20 秒)。「こんちりさん」の祈りが終わると、すぐにナレーションが始まる。ナレーションの間、踏絵の映像が映し出される。

登立のサトが新吉と入れ替わりに入ってくる。踏絵を終えた新吉は舞台上手袖に消え、そのまま紗幕前に用意された椅子に座り、桶に水を汲み、その中で先ほど踏んだ足を洗い、その足を腰の手拭いで拭くと、桶の水を少しずつ飲みほしていく。そして、身を屈めて「こんちりさんの祈り」を唱える。その間、登立のサトは紗幕の前にある踏絵を踏んだ状態でいる。上手の新吉の場面のみに天井からのスポットライトを当てる。サトには映像のライトが当たりシルエットをつくっている。

ナレーション②

　これが、キリシタン探索のために、毎年正月から始まって２月の半ばまでかけて、各地の庄屋や檀那寺で行われていた踏絵でございます。始まった年は定かではありませんが、宣教師たちがまだ潜伏していた１６２７年頃からはじまって、終わったのは日本が開国した１８５６年まで続いたのです。２２７

年間、七世代です。むごい拷問でした。人の胸のうちは誰にもわかりません。キリシタンであることを隠すために、足で踏んで見せても、本心を曲げてのことですから、みんな心では泣き泣き踏んでいました。だから、イエス様やマリア様の面影を踏んだ後は、家に戻って、踏んだ足をそっと洗い、その罪の水を飲んだのです。せめてもの償いのしるしでした。そして、親たちから代々伝えられていた、完全な痛悔のための赦しの祈り「こんちりさん」を唱えて、神さまのゆるしを心から祈ってきたのです。

踏絵は、目に見えない心への拷問でした。でも、毎年の踏絵があったから信仰は伝わりました。一年に一度、踏絵の前で自分がキリシタンであることを確かめ、神さまのゆるしを請い、償ってきました。そしたら、また新しい気持ちになったのです。神さまは、どんなに哀しく辛いことでも、それをお恵みに変えてくださるお方だと、身をもって思いました。

２５０年間、一人の神父様もいない時代、ずっと絶えることなく伝わっていたことがまだありました。それが洗礼です。祖母のカタリナ杉本ヤスは、浦上の水方・岩永又市が最後に洗礼を授けた人だったのかもしれません。

ナレーションが終わると紗幕が上がり、洗礼の場面に照明が入る。

―第二場―

登場人物

- 水方・岩永又市
- 井手弥四郎
- 井手ナカ
- 井手ヤス（赤ちゃんの人形）
- 代母たま

中央に水方・岩永又市がいる。その前には、赤ちゃんを抱いた母親、その傍には父親と、代母になる女性がいる。又市の後方には、納戸を開けて、マリア観音が置かれており、そのマリア観音の横にはローソクが一本灯されている。

井手ナカ　よし、よし、よし（赤子をあやしながら）泣かんで、よか子にしとかんばぞ。今から、神さまの子どもにしてもらうとじゃけんね。よし、よし、よし。

井手弥四郎　又市しゃん、忙しかとにすまんこつです。神さまからまた娘ばあてごうてもろうたよ。今日は、この子も、神さまの子どもにしてやってくれんね。おいたちは、なーも持たんばって、ちっとばっかし信仰はもっとります。こん子も、神さまの子どもになって、一生、神さまから守ってもろうて、どがん難儀してもケラケラ笑って生きて行けるごと、洗礼の恵みば授けてくれまっせ。

水方又市　ほう、みぞーか子たい。子どもん名前はなんって言うとな。

井手ナカ　娘の名前は、ヤスです。

水方又市　たま、ほらそこにあるお水の入った鉢ばもって、横に立ってくれんな。

たま　はい。

水方又市　じゃあ、神さまのお恵みを願ごうて、こん子の洗礼ば授けようか。

あなたたちは、悪魔とそのわざを捨てるや。

一同　はい、捨てます。

水方又市　天地の創造主、全能の父なる神、御子ゼズスと、御スピリトを信じるや。

一同　はい、信じたてまつる。

水方又市　死者の復活と永遠のいのちを信じるや。

一同　はい、信じたてまつる。

水方又市　ヤス、エゴ　テ　バプティゾ　インノミネ　パートリス　エト　フィリイ　エト　スピリトゥス　サンクティ　アーメン。（この祈りを唱えながら、赤ちゃんの額に三度水を灌ぐ。授け終わると赤ちゃんが泣き出す）よし、よし、こいでこん子も神さまの大切な子になった。洗礼名は代母の名をとって、カタリナってつけるけん、よく覚えとかんばぞ。

たま　カタリナヤス、ねー、きれーか名前ばもろうて良かったね。こん子は、きっと、神さまに喜ばるるよか子になるよ。代母のわたしがずーっと、祈っとるけん。

水方又市　わしらがこうして神さまば頼りに生きて来れたとは、洗礼ば授けてもろたからぞ。一人のパーデルもおらんごとなって、そいでも神さまの教えば生きて来れたとは、親たちがずっと洗礼ば授けてきてくれたからぞ。親が子どもに手渡すことのできる一番の宝は、洗礼ぞ。洗礼ば授けんごとなったら、信仰もなくなるし、仲間もおらんごとなってしまうとぞ。

井手弥四郎　そうたい、又市しゃんの言う通りたい。洗礼ば受けて、信仰の仲間に加えてもろうたから、どがんつらしかめにおうてん、忍んでこれた。これが、神さまも知らん、仲間もおらんで独りじゃったら、とうの昔に一家で死に絶えとったばい。洗礼は、かけがえのない恵みたい。これからも、洗礼ば途絶えさせんごと、子や孫にも言うて聞かせますけん。ほんに、おーきにな、又市しゃん。

水方又市　どら、サンタマリアさまに、感謝の祈りば捧（ささ）ぎゅうで。

子どもをかこんで一同が、跪いて、マリア観音の方を向いて「ガラサ」の祈りを唱え始める

「ガラサの祈り」が流れて５秒したら暗転になり、紗幕が下りる。「ガラサの祈り」が終わったら、すぐにナレーションに入る。紗幕には映像が映される。

ナレーション③

これがカタリナ杉本ヤスの洗礼でした。ヤスが洗礼を受ける 〜 年前の１８５６年のことでした。キリシタンの仲間内から、お金欲しさに役人への密告があって、潜伏時代に入って３回目のキリシタン検挙事件が起きました。これが「浦上三番崩れ」です。この時、浦上のキリシタンを束ねていた七代目の惣頭で帳方の吉蔵は、長い拷問の末、牢死しました。

実は日本に教会が誕生して間もなく、イエス様の教えをそのまま生きようと、世の中の貧しい人たちを助ける信者たちの活動が始まりました。それを束ねたのが信徒の世話役でした。世話役は、信者たちだけではなく宣教師が巡回してきたときには宿主となり、頼もしい相談役でした。やがて、司祭のいな

い２５０年間、帳方・水方・聞役と呼ばれた世話役たちが代々選ばれ、共同体に仕えて、誤りのない信仰を伝え、生活の絆もしっかりと結んでいきました。司祭がいなくなった教会で、オナジ信仰を手渡すことができたのは、信者たちに仕える三役がいたからでした。

しかし三番崩れの後、帳方も聞役もいなくなり、残った世話役は、平の水方、ドミンゴ岩永又市だけとなりました。しかも、４年におよぶ牢生活の末、又市の目は不自由になっていました。それでも又市は、生まれてくる浦上の子どもたちに洗礼を授けつづけたのです。ここで洗礼が途絶えたら、信仰も受け渡せず、「七代経てば、ローマのパーパさまからコンフェソーロが遣わされる」という約束も、ついえてしまうことを、又市は誰よりもよく知っていたからでした。水方の又市さんは、約束された日の復活の扉を開けるために生き残った門番のような人でした。

四年もかかって浦上三番崩れは終息しました。すでに、開港した長崎の港には、異人さんたちが行き交い、南山手の異人さんたちの住む地区には、見たこともない建物があちこちに建ち始めていました。やがて、屋根の上にまだ御禁制のはずの十字架を掲げた建物まで現われ、いつしか「フランス寺」と呼ばれて、完成前から人だかりができていました。先の見えなかった時代に、たしかに、新しい風が吹き始めていました。そして、浦上のキリシタンたちに、今まで感じたことのない胸騒ぎが始まっていました。

１８６４年の冬、キリシタンたちは、みあるじがお生まれになったナタラの晩に、ひそかに又市の家に集まっていました。

ナレーションが終わると紗幕が上がり、水方・又市の家の中に照明が入る。

―第三場―

登場人物

- ツネ
- トセ
- 茂八
- ミツ
- 又市
- 新吉
- 八
- 佐吉
- ハツ
- 重松

・ 役人（１）　新右衛門

・ 役人（２）　徳之進

ナタラの夜

又市の家

中央に納戸が開けられ、その中にマリア像が安置されている

一同車座

ツネ、戸を叩き、息せき切って上手の戸口より入ってくる

ツネ　子どんば寝かせよったら、遅うなってしもうて。（着物についている雪を払い落しながら）

トセ　ねーまたァ、連れてくれば良かったとに。

ツネ　あらよ、十人の子どんば、こん雪ん中、どげんして連れてくるかよ。

茂八　お前さんも、よう十人も作ったもん。

ツネ　作っとらんと、知らんうちにデウス様から授かったと。

ミツ　そうたい、こどもは授かりもんじゃけん、大事にせんばね。そいでも、知らんうちに十人たいね、

ツネさんは、よっぽど神さまからひいきされたばいね。

又市　どうね、これでみんな揃うたつな。今日はナタラやけん、いろいろ式ばせなならんこつのある。今日は一年で「上がりの日」と同じくらい大事か日たい。新吉どん、役人が見回りに来るっちゅう噂もある。寒かとにすまんばって、戸口で見張りばしてくれんの。

新吉　よかよか、おいは日頃はあんまし信心なせんけん、こげんときなっと償いばせんば、親父やお袋たちとおんなじ所に行ききらんごとなるもんな。

佐吉　ほらっ、八、いちいち言われんでん、早よう立たんば。誰に似たとじゃろ、ほんなこて、ぼーっとして気のきかん子じゃもんね。

八　わ、分かっとる、今立つってしよったったいね。誰に似たって、親に似らん子どものどこにおるとね。自分に似とるけんっていうて、なにかっていえば、八、八って、八つ当たりして。いっちょん好かん。こん親父は！

又市　すまんのう八、きつかとに、すかん役ばっかりお前に押しつけて。

八　なんの、なんの又市おじさん、「いと、たやすいことでござる。」（そういって、見栄を切る）

又市　八、いまん言いぐさはよかな、気に入った。八は、侍の子じゃなかとに、そん言葉は誰からなろたつな。

佐吉　なんの馬鹿の一つ覚えですたい。死んだ爺さんから、人からものを頼まれたら「いとたやすいことでござる」と、ふたつ返事ですぐに動くもんぞって、教え込まれたもんですけん。その昔、秀吉の時代に、高山右近というキリシタンの大名がおられて、そのお方は、宣教師から相談をもちかけられると、そういってすぐに立ち回ったそうで。あん時代に、秀吉も家康も一目も二目も置いて、パーデルたちからは一番頼りにされた、日本の教会の恩人ですたい。八も、こまんか時からそるばなろうて、今はまっで右近きどりですたい。

又市　佐吉さんの親父さんは、物知りじゃったもんな。八は、よかことばなろうて、ほんによかったな。

トセ　ほら、外は寒かけん、このドンザばかぶって行かんね、八。風邪ひいたら大変ぞうー。

八　いらん、いらん、そいば着ればバチかぶる。今夜はナタラぞ、おばちゃん。あん寒空の下、牛小屋にお生れなさった御子さまのことを思えば、何ちゅうことはなか。「いとたやすいことでござる」（また、胸をポンと打つ）こいは右近の力。「バカは風邪ひかん」、こいは、親父の口癖。なっ、親父。

佐吉　また、そげなこつば。もうよかけん、役人が来たら、そん草苗ばしっかり吹んばぞ。どらいっぺんそこで吹いてみろ。

八、しば笛を吹く、一、二度失敗。

八　　ああなあ、普段はもっと上手に鳴るとばって、今日はナタラじゃけん、草もお祝い日で、休みじゃろだい。どら、祝い日にも働く、不信心な草ば探すかあ。

三度目、諦めて口真似で草笛を吹きながら上手へ退場

又市　　そんなら、そろそろ「パーテル　ノステル」と「ガラサ」の祈りば始めようで。

納戸のマリア観音像に向かい祈りを始める。「てんにまします」の祈りで、「われら、人にゆるし申すごとく、われらがとがをゆるしたまえ」のところで、八の笛が吹かれ、新吉が叫ぶ。

新吉　　き、来たぞ！

新吉の声の後、婦人たち、あわてて食卓を出し、トセはとっくり、盆、料理を運ぶ

納戸の神棚を急いで閉める。取り繕っている間に、役人が激しく戸を叩く

男達、酔ったふりをして、歌などを歌う

役人二人、上手より登場

新右衛門　奉行所の者である。奉行所のものである。（声を張り上げて）

又市はおらぬか。

又市　ヘィ、私がさようで……。

徳之進　そちの家には、近頃、人が集まっていると聞くが、何の用だ。

又市　ヘィ、縄こも屋の商売をしておりますれば、何かと人の出入りも多くて、それに、ここんところ、娘を嫁にやったり、息子に嫁をもろうたりで、今日も、そのこつで近所の人に来てもろうて、気持ちだけの内祝いばしております、ヘィ。

重松、ちどり足で役人に近づく。

重松　お役目ご苦労さんでございます。今日はですな、又市おんしゃんとこの祝いばすっけん出てこいって言われてな、わしゃ、酒は好かんけん行かんて言うたとばってん、ここにおるカカァが行け行けって言うもんじゃけん…。

ハツ　うすらごとばっかり。うちは、そんげんことは言うとらん。酒癖の悪かとの。子どんがおらんとなら、あァたとは、とうの昔に別れとったったい！

重松　おい、こら！　今なんば言うたか、もう一ぺん言うてみろ。若っかときにはどげん言うたね。（**声色で**）重松っつァん、一緒になられんとなら、うちは死ぬ……

ハツ　まぁ、恥ずかしかー。お役人さんの前で、そげんこつば。うちは知らん、もう帰るけんね！

ハツ、立ち上がり、帰り支度。

徳之進　まぁ、まぁ、折角の祝い事。ここで夫婦げんかは、主人の又市に申し訳なかろう。

重松　そうたい、そうたい、お役人さんの言う通り！　いっちょ、口なおしに、ハツ！　そげんブッチョ面しとったら、よか女ごも大なしぞ。また、一つ、あん「阿呆踊り」ばしゅうで。

一同　おう、そいがよか、そいがよか。（みんなではやしたてる）

佐吉の「オーヤット、ヤット」の掛け声で阿呆踊りが始まる、一同もそれぞれに踊りの輪に入る。皿を鳴らして囃し立てる者んもいる。

「オーヤット、ヤット、エライヤッチャ　エライヤッチャ　ヨイヨイヨイヨイ、踊る阿呆に　見る阿呆　同じ阿呆なら　踊らにゃ　損々　思案橋まで　行かんか　来い来い、アーラ、エライヤッチャ　エライヤッチャ　ヨイヨイヨイヨイ、　竹山通れば　竹ばかり　石橋通れば　石ばかり　猪豆食うて　ホーイ　ホイ　ホイ」

役人二人、「よか祝いじゃ、よか祝いじゃ、存分に楽しめ」と言って、笑いながら上手へ退場。踊り終った頃、見張り役の新吉、上手より役人の後をつける。八も後からついていく。

新吉　もうよかぞ、役人は、帰ってしもうたけん。

重松夫婦、そのままの状態。重松はとたんに元の厳しい顔になる。

又市　そうな、帰ったな。（淋しそうな声）

ミツ　ああ、悲しかなあ、こげんことまでせんば、信仰ば守れん、今ん世の中が悲しか。七代たてば、パーデルがおいでなさって、大声で祈りのできる日のくるって聞いとるばってん、ほんなこてパーデルは来るとやろうか。あん約束はほんとうじゃろうか。もう、その日は過ぎたとじゃなかと？

又市　（淋しそうに）信ずるよりほかなかたい。ミツさん、今頃になってなーして気の弱かことば言うとな。そん約束ば、たった一つの希望にして、２５０年間、わしらの親たちは、くじけんで、ひねんくれんで生きて来たとじゃなかとね。な、２５０年ぞ、そんことだけでも奇跡たい。約束ばしたとは、バスチャン様っていうばって、わしは、ほんなこて約束をしてくださったのは、神さまだと思

うとる。神さまは、約束を絶対たがえんお方ぞ。だから、ミツさん、あと少し、あと少し信じてまってみゅうで。

重松　俺りも情けんなか。こげな猿芝居のごとあることばして。いつまで、信仰ば隠さなならんとやろうか。もう限界ばい。信じるとに疲れたばい。

トセ　神さまもむげらしか。こげんことば、子どんの代にもさすっとやろか。又市しゃんの言葉の揚げ足をとるごとあるばって、そん約束した神さまは、うったちば、もう忘れておしまいに、なったとじゃなかろうか。

又市　そげんことのあってたまんもんな、そげんことの。もういっぺん言うぞ、わしらの先祖はな、むかしは大坂や有馬のキリシタン大名に仕えた侍じゃった。ばって、こん教えんために、禄も刀もみんな捨てて、できもせん百姓ばして耐えて来た。そいだけじゃなか、ザビエル様から３００年このかた、こん教えは「魂の救いのためになくてはなりません」「まっとうな人間として生きるためにこれだけは譲れません」といって、どれだけの信者が命ばささげてきたね。

ミツ　そうよな、死んだじいさんが、雲仙地獄の話ば、よう聞かせてくれよった。地獄ん、グツグツたぎった湯ば頭からかけられてん、そいでん恨み言ひとつ言わんで、神さまばたたえて死んだって聞いた。

又市　そうたい。あん、雲仙の地獄ん底にも、有馬川の中州にも、平戸や生月にも、そして、西坂にも、信仰の貴か命の種の、蒔かれとっとぞ。信仰するもんには、犬死はなかと。そるだけは、神さまがゆるさん。あん蒔かれた種が芽ばだしたとき、誰がそるば育つるとね。もうじき、必ず芽の出て来る。待とうで。もう少し、待ってみゅうで。

ミツ　言いたかことはようわかるばって、又市しゃん、私にはもう一つ腑に落ちんことのあるとよな。天地万物ばお造りになった神様は、愛の神様って言うとに、なして、わが子がこげんつらしか目にあうとに、黙っておらすとやろか。

ハツ　ミツしゃん、私も神さまのなさることはよう分からんばって、こん後に、何か待っとっとさ、きっと良かことの待っとるに違いなか。

又市　わしにも、難しかことは分からん。パーデル様がおれば、よう分かるごと話ばしてくれるとやろばってん。ただ、ひとつだけ、わしが聞いたことにゃ、信仰のために殺された人たちゃ、たいていの人が自分たちをせがめる人ばゆるしたり、死ぬ時も泣きわめいたりせんで、きれいか顔ばして最後ば迎えたっちいう話たい。命に代えてん、まだ良かことのあることば、あん人たちゃ、死ぬ前からはっきりと知っとったとじゃなかろうか。思えば、わしら百姓も、夏ん盛り、日がな一日（いちんち)、汗水流して、田の草ば取ったぁ、秋ん収穫ば信じてんことじゃろ。先にある実りば信じとるも

んは、いまの難儀に愚痴はこぼさんもんたい。

八　あらよぅ、ざぁまに難しか話ばするもんたいネ。オイは、親父から草ば取れって言わるっけん、夏草ば取るとたい。そしたら秋ん来て刈り入れたい。先は見えんじゃったばってん、言われたこつば信じて取るだけたいネ。そんだけのこつたい。

トセ　そうたい、八の言う通りたい。理屈で信心ばすっとじゃなかと。なあ、八。

又市　昔、ジェズス様の弟子にポーロ様って言う人のおってな。そん人の言うには「私はキリスト様ば知ってから愚か者になった。しかし、キリスト様のために愚か者になったことば私は自慢する」って。

八　そいはオルも知っとる。愚か者って、バカのことじゃろ。右近殿も同じことを申された。「八、人間バカにならんば使いものにはならぬ」って。ばってん、又市おんしゃん、オイには分からんこつの一つある。みんなオルのこつばバカ、バカ、八はどっから見てん立派なバカって言うとに、そん同じ口で「八、お前はいざというときは、使いものにならん」って。ほんなら聞くばって、オルは本当はバカじゃなかっていうこったいな、又市おんしゃん。

又市　そうよのう。それは多分、お前がキリスト様のためにバカになっとるってことば、みんなが知らんとたい。人間の言うバカとキリスト様の言うバカは違うとじゃもんね。

ハツ　世間から見ればうったちゃ、みーんなバカたい。ばってん、よか。こんあと、きっとよかことのあ

る。今はつらしかばってん、そいば信じて待とうで。待ってみゅうで。

八が、すっと立ち上がり、直立不動で叫ぶように歌う

八　沖に見えるはパーパの船よ

丸にヤの字の帆が見える

春も来た来た夏も来た

サンタマリアはいつ来てくれる

八が歌い終わると徐々に暗転になり、同時に紗幕が下りてくる。そして、ナレーションが始まり、映像が

映し出される。

―― 二　幕 ――

ナレーション④

パリ外国宣教会の、ベルナールド・プチジャン神父様が長崎の地を踏んだのは、１８６４年７月のことでした。横浜から長崎に任命されたことを、プチジャン神父様はたいそうよろこばれました。というのは、その前の年、教皇ピオ９世が、１５９７年に西坂で殉教した26人を聖人の位に挙げられ、ヨーロッパでは、日本26聖人に対する崇敬が、わきあがっていたからです。プチジャン神父様は、その殉教の地長崎を、夢にまで見ていたそうです。

でも、長崎の地は、鎖国は開けたものの、キリシタン禁教令はまだ解かれていませんでした。それでも、長崎の街を歩くと、あちこちに、キリシタンの匂いを感じることができました。通りの小路（こみち）から、今にもキリシタンたちが、姿を現しそうな、錯覚さえ覚えました。

プチジャン神父様の長崎での最初の仕事は、26聖人の殉教地探しと、潜んでいるはずの日本のキリスト者を招くために、すでに建設中の天主堂の完成でした。プチジャン神父の前に、すでに、フューレ神父が長崎に入っており、司祭館と天主堂の地ならしを終えていました。

ナレーションが終わると紗幕が上がる。舞台に照明が入る。

場所　司祭館庭先

登場人物

- **プチジャン神父**
- **フューレ神父**
- **ロカーニュ神父**
- **長崎奉行　河津守**（かわづのかみ）
- **河津守の中間　与作**

プチジャン、フューレ、ロカーニュ、３人椅子にかけている

フューレ　　プチジャン神父様、天主堂もまもなく完成ですね。

プチジャン　これもフューレ神父様のお陰です。私は神父様の設計通り進むよう、現場を監督しているだけです。

ロカーニュ　それにしても、随分工事が手間取っているのです。このごろでは、さすがのプチジャン神父様も、神経質になってピリピリしています。

プチジャン　十字架が立つ尖塔の下に「天主堂」の文字を入れたいのですが、棟梁の小山が、なかなか言うことを聞いてくれません。日本にはそんな大きな筆はないとか何とか言って。

フューレ　彼は天草の職人でしょう。

プチジャン　そうです。代々宮大工とかで、技術はかなりすぐれたものを持っているのですが、とにかく石のように頑固で。

ロカーニュ　プチジャン神父様は言うんですよ。天草は昔キリシタンの島だったから、彼の先祖も教会を作ったかも知れないと。そして、小山ももとはキリシタンだったかもしれないと。

プチジャン　はじめは、そんな期待を持ったのですが、小山の言動を見て、今はもうあきらめました。

フューレ　いえ、神父様。私たちが日本に派遣された目的は、かつて多くの宣教師が命がけで育て、殉教にもめげなかった日本の信者たちの子孫を探すことです。復活したキリシタンが、間もなく完成するこの天主堂に帰ってくる日が来るのを、固く信じています。

プチジャン　それはそうと、フューレ神父様、26聖人の殉教跡地がやっと見つかりましたよ。神父様はすでにご

存知でしたか。

フューレ　確かな事は分かりませんでした。しかし、パリ外国宣教会のレオン・パジェス神父様の本から、大体の方角だけは、見当はついていました。

プチジャン　そう、わたしもパジェス神父様の本をもとに、長崎の人たちに聞き合せたり、実際歩いてみたりして確かめました。ほら、ご覧下さい。向うに見える小高い山、あれが女風頭、地元では立山といって、あそこが26聖人が殉教した丘です。偶然かも知れませんが、この天主堂とちょうど向かい合っています。

上手袖より河津守と中間与作が会話しながら登場

中間与作　旦那様、これから参るフランス寺の異人さんは、本当にパーデルでござりますか？

河津守　与作、お前はそのパーデルという言葉をなぜ知っておる。確か、お前の出は五島の桐とか言っておったの。だれからその言葉を教わった。

中間与作　いえ、旦那様。誰からも教わってはおりまっしぇんが、フランス寺見物に行った人たちの間では、もっぱらの評判でござります。

河津守　そのような噂は捨ておけ。与作、言葉には用心せねば、お前にキリシタンの嫌疑でもかけられようものなら、拙者はお役御免の上、切腹ともなりかねん。以後、この話はなしじゃ。（少し不機嫌な様

子で）それより早う！（フランス寺への先導を急かせる）

中間与作　お許しください、旦那様。（すぐ教会の庭に近づいて、大声で叫ぶ）失礼します、プチジャン殿。長崎奉行河津守（かわづのかみ）様の御用でございます。

プチジャン　（少し驚いたように）はて、河津守（かわづのかみ）様が何の御用で……。どうぞ、こちらへお通しください。

河津守　これは、これは、お三方集まって、何の密談ですかな。よもや、この長崎を乗っ取ってしまう企みではありますまいな。いや、いや、これは冗談、冗談。パーデルを名乗る者が、そのような物騒なことをと、疑う事だけでも罪深い。ゆるされい、ゆるされい。ただ、近頃、異人どもは、素行が悪くて拙者も参っておる。船員たちは特にひどい。なんとかならぬものかのう？

プチジャン　申し訳ございません。異人といっても、アメリカ、イギリス、ロシア、いろいろですから、私たちフランス人だけでは、どうにもならないこともございます。

河津守　いやいや、分かっておる、分かっておる。貴公の国の異人たちは別じゃ。ところで、プチジャン殿、今日は貴公に用があって参ったのじゃが。

プチジャン　さて、私にどんなご用がありましょうか。

河津守　フランス語学校が出来ているのは貴公も知っておるであろう。生徒も集まったのじゃが、肝心のフランス語を教える先生がいないのじゃ。貴公、引き受けてくれまいかのう。

プチジャン　それは有難いご用で、私で役にたつことでしたら、喜んでお手伝いいたしましょう。しかし、困ったことが１つあります。

河津守　うん、その困ったこととはなんじゃ。

プチジャン　天主堂の工事が遅れているのでございます。今、その事でこの二人に叱られていたところでございました。本来ならば、もう完成しているはずなのですが。

河津守　そうか、そうか、そのことならば心配には及ばぬ。棟梁は確か小山とか申したな。明日からでも突貫工事を命じよう。で、いつまでに完成すればよいのかな。

プチジャン　明けて２月５日までには、どんなことがあっても完成させとうございます。

河津守　ほう、２月５日とは、またずいぶんと半端な日を選んだものだ。何か、その日に仔細あってのことか、かまわん、言うてみよ。

プチジャン　河津守（かわづのかみ）様の前で申すのもどうかと思いますが、実はこの日は、267年前に、私どもと同じ神を信じて、そのために向うに見える女風頭の丘で殉教した26聖人たちの命日なのでございます。叶いますならば、その日にこの天主堂の落成式をあげたいと考えております。

河津守　そうか、命日か、お主たちも律義じゃの、よし心得た。一月末までには、この河津守、責任をもって引き受けよう。ただし、条件がある。貴公、フランス語の先生は引き受けてくれるの。

プチジャン　それはもう喜んで。

河津守　これで拙者も一安心。いや、実のところ、適当な人物がいなくて参っていたところだ。プチジャン殿、しかと頼んだぞ。与作、帰るぞ。殉教者の命日か、命日か……命日のう……。

つぶやきながら河津守、上手へ帰ろうとして、とっさに何か気づいたように引き返す」

河津守　（眼光鋭く神父たちを威圧するように）ところで、さっきの話だが…。

ロカーニュ　（立ち上がり）と申しますと。

河津守　26聖人の殉教とか申しておったのう。貴公らにとっては殉教かも知れぬが、この日の本の国にとっては、邪道をもって民衆を迷わそうとした、罪人ではなかったのか。260年経ったからと言って、黒が白に変わるわけではない。罪は罪のまま残る。そこのところは誤解なさるなよ。与作、それをここへ。　（与作、「はい、旦那様」と言って、担ぎ棒の箱から禁令書を差し出す。河津守、威圧的な態度で続ける）今一度、言い渡す。条約によって、貴公らの居留地外での説教や活動も禁じられていることを忘れるでないぞ。キリシタン禁教令は今も生きているのだからの。それは、それ、これは、これで参りますぞ、よろしいかな、プチジャン先生。

プチジャン　はい、そのことでしたら、よーく承知しております。

河津守　そうであろう、そうであろう。だがな、この天主堂、そちたちのためにしては少し建物が大きすぎ

はしないか。奉行所の中には、快く思っていない連中もおるでな。あんまり、ことを荒立ててもらっては、拙者も立場上、困る。ここんところ、世の中がひどく騒がしい。穏やかに参ろう、穏やかに。

フューレ　そのようなことまで、おっしゃる人がいるのですか。

河津守　なぁに、貧乏国のひがみというやつで、気にするには及ばぬ。だが、あらぬ疑いを掛けられぬよう、用心に越したことはない。火のないところには、煙も立たぬものじゃ。いやこれは、長居をしてしまった。ごめん。与作、何をぼーっとしとる。帰るぞ。

中間与作　へい、旦那様。

河津守と中間与作は上手へ
帰ったのを確認して

プチジャン　フューレ神父様、河津守(かわづのかみ)殿のいまの話、少し気になりませんか。

フューレ　いまだに、キリシタンの禁教令がしかれているという話ですか。

プチジャン　そうです。今も禁教令が生きているということは、キリシタンが今もどこかに隠れているということにはなりませんか。だから、キリシタンの話になるとあれほど気難しくなるのでは？

ロカーニュ　プチジャン神父様、またその話ですか。あなたが長崎に来られてからというもの、神父様は「長崎のどこかに殉教者の子孫が生きているはず、きっと、潜んでいるはずだ」と、そればかり繰り返しておられます。

フューレ　確かに、神様のみ業は計り知れません、もし生きていたら奇跡でしょう。でも、この国から司祭がいなくなってもう２５０年たっているのですよ。

ロカーニュ　そうです、２５０年です。司祭を見失った信者たち、それは羊飼いを失くした羊の群れと同じで、ちりぢりばらばらになって、オオカミや獣の餌食になってしまうのが当然です。また、「種蒔き」のたとえ話にもあるように、先人たちの蒔いた種は、岩の上に落ちてしまって、すでに小鳥たちの餌になってしまったか、あるいは、長い間いばらに覆われて枯れてしまったのです。

プチジャン　いえ、もしそれを言うのなら、私は、「一粒の麦」のたとえを信じたいのです。この長崎では何百人、いえ何千人もの信者のいのちが、時には血を流して、時には炎に包まれて、時には海に沈められて、この国の未来のために捧げられたのです。それが無駄死だったとは、私には思えないのです。いいえ、無駄になるはずはありません。「たとえ、母親が自分の乳飲み子を忘れようとも、女が自分の産んだ子を忘れようとも、私があなたを忘れることはけっしてない。」このイザヤ書のみことばは、神さまの約束、私の希望なんです。

フューレ　三年前、ローマで 26 人の殉教者の列聖式がありましたね。あれは、私たちのために準備された「時のしるし」かも知れません。プチジャン神父様、きっと不思議なことが用意されていると私も信じます。

プチジャン　（窓の外を指さしながら）あれをご覧ください。あの６００年の樹齢を持つ楠の大木を。岩肌をしっかり抱いて、根は土深く降りているのです。６００年、誰も水をやらなかった。誰も肥料を施さなかった。それでも生きている。ご覧ください。あの鬱蒼と茂った緑。夏には涼しい木陰を作り、春には小鳥たちを憩わせているのです。

徐々に暗転となり、紗幕が下りる。そしてナレーションが始まり、映像が映し出される。

―― 三　幕（二場）――

―第一場―

サバト寄り

農家らしき居間。聖母像

登場人物

・ テル　４５才

・ 多十（テルの夫）５５才

・ ゆり　５０才

・ つる　４５才

・ 八　　３０才

・ 吉蔵の娘ヨネ　３０才

・ マツ　４０代

・ スミ　４０代

・ サモ　４０代

・ 辻の佐助　　３０代

・ 一本木の安太郎　３０代

・ 平の久米八　　４０代

ナレーション⑤

慶応元年、１８６５年２月２９日、プチジャン神父様の監督によって完成した大浦天主堂は、横浜から

来た使徒座代理区長代理のジラール神父様の司式で、献堂式が執り行われました。

白亜の天主堂は港を見下ろす南山手にあって、空にそびえる尖塔には、金の十字架が美しく輝いていました。長崎の人たちは、この天主堂をフランス寺と呼び、毎日数百人の見物人で堂内は人が絶えませんでした。もちろん、訪れた見物人の中にはキリシタンもいました。

しかし、『七代たてばパーデルがおいでくださる』というバスチャンからの言い伝えを希望にしてきたキリシタンにとって、大浦天主堂見物はまったく違った意味をもっていました。それは、依然として続く禁教令のもと、役人の目は厳しく、確かめに行って、キリシタンの名乗りを上げたとたん、浦上での弾圧再開の危険もはらんでいました。そのために、浦上では、それでも確かめに行くという組と、危険だからまず様子をみるという組の二つに分れ、夜ごと集まっては、議論を重ねていました。そんなある夜のサバト寄りのことでした。

ナレーションが終わると、紗幕が上がり、多十の家の庭先に照明が入る。

早春の日暮れ時

多十、庭先で藁を打つ

テル、野菜を籠にいれて、上手より急ぎ足で入ってくる

テル　日ぐらしばしてしもうて…。あらよ、もう、こげな時間たい。

多十　（藁を打ちながら振り返り、外の夕焼けを伺う）もうそげな時間な。冬ん日は早かな。一日なんばしたかわからんうち、あっという間に日の暮れる。

テル　今日は、うちん方ん、当番じゃけん、何なりと飯ん支度ばせんばいかんとに。なあも、用意しとらんたい。どうすっちか、こらあ。

多十　そうな、今日はもう土曜かあ。サバト寄りたいな。

多十、片づけて腰を伸ばし、縁に腰を下ろす

多十　ところで、テルよい、サバト寄りは良かばってん、お前たちはフランス寺ん噂ばようしよるって話じゃが、あんまりせん方がよかぞ。

テル　別に変な話じゃなか。村じゃだいでんしよる話ば、茶のみ話にしよるだけたいね。

多十　ならば良かばってん、めったな話はせん方がよか。おどんがしらんうちに世の中はどんどん進みよる。大浦あたりじゃ、昼んひなかに赤毛の異人たちが、丸山ん芸者ば、連れて回りよるって話じゃ

なかね。

テル　（湯飲みに茶を注ぎ、多十の横に出しながら）ばってん、フランス寺には、塔のてっぺんに十字架の立っとるっていう話ばい。十字架っていえば、そいはキリシタンの証拠じゃろもん。

多十　そるも聞いた。

テル　そいだけじゃなか。そこにおらす異人さんはな、黒か服ば着て、胸には十字架のごとあるもんばさげとるっちゅう話ばい。

多十　そこたい、おるが心配すったあ。

テル　どげな心配ばな。

多十　黒か服ば着て、十字架ば下げとっけんて言うたっちゃ、そるがパーデルっていう証拠にはならん。テルよい、お前は三年前のことば覚えとるじゃろ。東山手に、ちょうど今度と同じごと、屋根の上に十字架ばつけた白か建物の建ったろうが。あんときも、パーデルの来たかもって、確かめにいったじゃろが。そん人は、親切で優しか異人さんで、確かにキリシタンの教えば口にした。ばってん、おりたちの帰りしな、「今度来るときは、家族ば連れてきてくださーい、そしたら、うちの家内や子ども喜びまーす」っていうて、自分は結婚しとる身だと、言うたたい。あんとき、みんなびっくりして、唾（つば）ばのんだたい。パーデルは、神さまと人のために、生涯結婚せんで、独身で捧げ

る人ってずっと聞いて来た。ばってん、３年前は、十字架のあったばって、違ごとったたい。あんときは、間一髪で逃げて来たとぞ。

テル　覚えとるさ、東山手は違ごとった。なら、今度の南山手のフランス寺も確かめに行けば良かたいね。おとろしかとね、待って、待って、ここまできたとに、ほんに意気地のなか人間たい、ああたは。

多十　じゃけん、女はバカって言うとたいね。

テル　（笑いながら）確かめに行くとがバカなら、確かめもせんで、あぁでんなか、こうでんなかっちゅうて、腕ば組んで眺めとるもんな、もっとバカたいね、はっ、話にもならん。

多十　いずれにしてん、これはふとか問題ぞ、女ごどんが口出しすることじゃなか。

テル　（笑いながら）ハイ、ハイ、女ごはバカじゃけんな。バカはいざというときは何の役にもたたんとたいね。「バカにならんば信仰はできん」というたとは、どこのどなたかな。バカばとったら、信仰はただの理屈。理屈は膏薬といっしょ、汗かけばすぐにはげる。あーたの信仰は膏薬じゃったつな！多十さんよい、あーたはいつからそげん腑抜けた、意気地なしになったつな！

多十　そげん、ふてくされんちゃ、どぅあんな。俺るはお前たちんこつば思うて言いよっとぞ。

テル　有り難か話、こげなバカば愛してもろうて。

多十　（テルの方に向き直り）なら、話ばしてきかしゅう。

よう聞け。そん話はな、四つの集落の世話役さんたちが詮議ばした結果、結論が出たとよ。

お前の言うごと、確かめに行こうと言うもんも何人かおった。ばってん、３年前のごと、万が一ちごうとったら、こん村はどげんなっか。９年前の惣頭の吉蔵どんが捕まって牢死して、大騒ぎになったときんことば思い出してみろ。あげな騒動になってしまうとぞ。

テル　（立って片づけながら）こげんこつば言うたら、また、バカって言わるっかもしれんばって、７代たてばパーデルが必ずローマのパーパさまから遣わされるっていう、言い伝えのあるたい。うちは数えてみたとよ。そしたらうったちが丁度その７代目にあたっとっとよ。ばってん、心配せんでよか。男の顔(かお)ば汚すようなことは、うちたちはせんけん。

（フスマを開けて隣の部屋へ）

多十　そいがよか、そいがよか。どら、早よう、飯ん支度ばせんね。そろそろ、みんなも集まって来る頃じゃろ。

徐々に暗転となり、テルは下手に料理を取りに向かう。暗転後にすぐに、中割幕が開き、一同「ガラサの祈り」を唱えている。そこに照明が入る。

―第二場―

舞台暗く、マリア観音のみ小さな光

婦人たち、車座になって「ガラサの祈り」を唱えている

舞台、少しずつ明るく

祈りが終わったとき照明、全開

料理が食台に並んでいる

テル、下手奥より、フスマを開けて、そぼろを鉢に盛って出てくる

テル　段取りの悪うして、なぁも、なかとよ。つまらんもんばって、食べてくれんね。

ツル　あらまぁ、そぼろたい。テルしゃんの作ったそぼろは、格別おいしかもんね。

みんな小皿に取って食べ始める。

マツ　　ほんとに、良か味のしとるぅ。うちん方じゃ、お前の作ったそぼろは、塩んかるうして食われんて、文句ばっかり言わるっとよ。

ゆり　　（淋しげに）文句ば言うてくるる亭主のおんもんなあ、よかたい。

マツ　　ばって、ゆりしゃんば見とったら、うらやましか。何て言うたっちゃ産婆さんじゃけん、手に仕事ば持ったもんな、いざというとき強かもんね。

ゆり　　それが仇になって、夫ば粗末にしたごとある。死んでから言うても間に合わんばって、もうちょっと大事にしてやればよかったって、今になって後悔するときのあると。

スミ　　良か人じゃったもんな、あげな信心か人やったけん、まっすぐパライソに行ったろうだい。

テル　　ところで姉しゃん、こないだから「フランス寺に行ってみゅうかな」って言おらしたばって、ほんなこて、行って来たとな。

ゆり　　小曽根んマツが、臨月の近こうなったけん、様子ば見に行った帰りに、ちっと寄って見たとよ。

全身身を乗り出す

テル（一同）し、して、ど、どげんじゃった。異人さんば見たとね。

ゆり　あごに髭ばはやした、眼の澄―んだ人じゃった。

ツル　どげな服装やったね。

ゆり　黒か服の長かとば着て、胸に十字架ばさげておらした。遠くからやったけん、よう分からんじゃったばって、なんか、やさぁしか人のごと見えた。

テル　今度こそ、そん人がほんまもんのパーデルじゃろか。三年まえのごつ、また偽もんじゃろか。

ゆり　分からんたい、七代たてばパーデルが来るって、ずっと伝えられてきたばってん、姿、形までは伝えてきとらんし、だぁれも知らんたい。

サモ　あっ、そう言えば、死んだじいさんが、パーデル様の見分け方ば教えてくれた。（節をつけて）

一ツ　ローマのパーパさまの使いや否（いな）や。

二ツ　サンタマリアば崇敬しているや否や。

三ツ　ビルゼンであるや否や。

ツル　そのビルゼンて、何のこつな。

ゆり　妻をめとらず、神さまと教会に身ば捧げて、一生涯、独り身で生きるっちゅう意味たい。

テル　そいで、姉（あね）しゃんが見たその異人さんな、ビルゼンのごと見えたね。

ゆり　　そげんこつ、外見で分かるわけなかたい。どこかに、奥さんや子どものおるかもしれんし。ばってん、清らかぁな感じやった。どげん言うてよかか、こう一見た瞬間、（胸を押さえて）ここんとこが熱うなってさ、こん人は間違いなかって、そげん思うたとよ。

草笛、近くで聞こえる
全員あわてて総立ち
テルは、マリア観音を急いで隠そうとする
上手より、八が、なに食わぬ顔で草笛を吹きながら入ってくる

ゆり　　なんごつな！　八。

八　　なんごつって、なんな。

テル　　今、草笛ば吹いたたい。

八　　あぁ、これな。星のあんまり綺麗かったけん、ほれぼれして、笛ば吹いてみただけたい。

テル　　あのなぁ、八、なぁもなかとに夜中に笛ば吹くもんじゃなか。お前の吹く笛は、合図ぞ。みんなびっくりするたい。

マツ　うちはもう、役人が踏み込んで来たと思うて、心の臓のばくばくしとる。

八　役人な来よらんばって、男衆の三人ばっか、こっちに来よったばい。

ゆり　よかよか八、そがん萎れてしまわんで。元気のなか八はつまらんぞ。ご飯は食べたとね。

八　食うたごと、食わんごと…。どっちじゃったかな。「武士は食わねど、高楊枝」と、右近殿が申されておった。

ゆり　右近殿はひとまず横に置いて、腹ん、すいとっとじゃろ、上がって食べんね。

八　いんにゃ、いらん、いらん（手を横に振りながら）

死んだおカカが言いよった。飯時によそん家にいったらいかん。おまえは乞食じゃなかとけんて……。向うに、そぼろんあってん、犬のごとよだれば出すなって。

（言いながら、ごくんと唾を飲み込んで、そぼろのある食卓をのぞく）

テル　そげん遠慮せんでよかけん食べんね。ほらぁこっち、上がらんね。

八　（照れながら）女ご衆の中に、この色男ひとり。世間がうるさかけんな。

スミ　八っしゃんは、ほんな男前じゃもんな。

八　また、そげんこつば。俺いは、本当のことば言わるっことが一番好かんと。

ゆり　（やさしく）何でんよかけん、早よう上がって食べろ。

八　そこまでいわれて断ったら、男のなおれ。せっかくの皆の善意、ではちと御馳になろうかの。拙者ごときのために、かたじけない。

（言いながら上り、ガツガツ食べ始める。）

スミ　八、そんチョン髷（まげ）言葉はやめんね。ほんなこて、やぜらしか子な、お前は。

上手より男達の物々しい声がして、戸を叩いて、足音荒く、怒って入ってくる

佐助　おらすとの。

テル　これはまた佐助どん、夜分にどうしたこつな。

安太郎　夜分で悪かったのう。俺どんがごつ貧乏百姓は、夜中にならんば、出てもさるかれんと。

ゆり　（やさしく）そげな角の立つものば言うて。用のあって来たとなら来たごと、やぁらしか挨拶ばしたらどげんね。

久米八　角の立つも立たんもあんもんな。お前どんが、どげん企（たくら）みばしよっか、俺どんが知らんぐらい思とっとな。

ゆり　企むのなんのって、人聞きの悪かぁ。同じキリシタンの仲間同志、互いに隠し事のあってよかもんね。

佐助　しらばっくれて、何ちゃ聞いて知っとっとばよ。

ゆり　誰いから、何ば聞いて、そげんいきり立っとっとね。（ぽんっと手を一つ叩いて）あーん。ひょっとしたらフランス寺ん話じゃなかな。

安太郎　そいにきまっとったい。

ゆり　ならば、それは、うち一人の問題たい。ほかんもんな、なーも関係なか話。うちが一人で思うて、一人で心に決めたこと。ここにおるもんは無論、お前さんたちや、村に迷惑ばかけるようなことはせん。

佐助　ほう、女ごも手に職ば持っとけば、強かのう。ざぁまなもんたい。

久米八　亭主（ていしゅ）に早死にされて、もうどうでもよかごとなったっちゃなかつな。

多十、奥から静かに入ってくる

佐助　おう、多十しゃん、起きとったとの。

多十　起きるも起きんも、こん夜更けに、そげな太か声ば聞けば、寝てもおられんたい…。どげんしたつな…。

佐助　どげんもこげんも、あぁた。こん女ご衆どんが、フランス寺ん異人さんの所に行くっちゅう話たいね。

安太郎　女ご衆だけじゃなか。

久米八　女ごだけで、そげな肝ん太か事の出来るわけはなか。誰いか知らんばってん、裏で男の糸ば引きよるって言うはなしばい。

多十　（落ち着いて）そいが、こんワシじゃと言いたかとの。

安太郎　わが胸に聞いてみれば分かるこったいね。

多十　（怒って前に出る）そうのぅ。一本木あたりじゃ、そげん話の出来あがっとっとたいな。そんなら、そいでよか。多十も男、帰ったら一本木の連中に、そん通りたいって、そげん言うとってくれんの。

久米八　さ、佐助どん、こ、こいで分かったろう。はよ帰ろう。

佐助　こいで、また、村中一騒動たい、こらっ。野良仕事もおてちいてでけん。忙しかっちゅうとに、ったく。多十しゃんば、見損のうたばい。

安太郎　佐助どん、帰ろ。

久米八　おぅ、帰ろ、帰ろっ。

捨て台詞を残して、男達、荒々しく上手に帰る

多十　難かしか世の中になったのう。総頭もおらん。帳方もおらん。平の水方ん又市さん一人じゃ、こん広か浦上ば治むったぁ、もう無理ばいな……。ほんなこて、あん約束のごと、パーデルさまに早よう来てもらわんば……。

ゆり　多十しゃんにまでこげな迷惑ばかけてしもうて。（両手をついてお詫びする）

多十　そげなこと、心配せんちゃよか。村んもんな、だいでん、あんフランス寺の異人さんは、今度こそパーデルさまではなかろうかって、心の中じゃ思うとっとよ。ばってん、そいば口に出して言えば、こげんこつになっと。そいが恐ろしかだけたい。

テル　ばってん、おんなじ神さまば信じとる仲間うちで、あげな酷（ひど）かことば言わせてよかとな。なさけんなか。

多十　みんなどがんしてよかかほんとは、分からんで、うろたえとっとたい。テル、お前にとって、ゆりしゃんはたった一人の姉さんじゃなかね。ゆりしゃん一人ば、悪もんにするわけにはいかん。

ゆり　多十しゃん、気持ちは嬉しかばってん、そんことなら、うち一人に任せてもらえんじゃろうか。そこまで考えてはおらんじゃったばってん、さっき、あん人たちに、あげな言い方ばされて、うちの腹は決まったとよ。浦上はオナジことば、ずっと絶やさず伝えてきた。でも、お互いにここまで疑うようになった。心はオナジどころか、バラバラたい。うちが、大浦の異人さんの所に行って、オ

ナジかどうかば確かめてくるけん。そしたら、また浦上はみんながオナジになる。

ヨネ　昔ん人たちゃ、命懸けでパーデル様ばかくもうたり、役人に見つかってパーデルさまと一緒に十字架にかかったりしたっていうとに、今じゃ、こんありさま。情けなか。ゆりしゃん、うちも腹ば決むっけん、万が一ちごうて、殺されたら、一緒にパライソにいくだけたい。

婦人たち、うなずく

スミ　ヨネしゃんの言う通りたい。ゆりしゃん、うったちも一緒に連れて行ってくれんね。たのむけんな。

八　ゆり姉さん、みんなの知っとるごと、おいも色男たい。ここで、おいにもひと働きさせてくれんね。うちん方ん裏に、太か木刀（ぼくとう）のあっと、おいがそいば脇にさして持っていくけん。用心棒のおいがついとけば、なあもおとろしかもんはなか。

テル　八しゃん、戦ばしに行くとじゃなかとよ。異人さんがパーデル様かどうか、確かめに行くとよ。もし、ちごうとって、役人に捕まったら、お前も殺さるっかも知れんとよ。そいでもよかとな。

八　そん時ゃ、役人に捕まらんごと、おいが、こん笛の破るっごと太とう吹くけん、みんな逃げればよかたいね。おいは、一番鶏の八、って言うて、長崎の町ではちっと名の知れとぞ。

ゆり　八、おーきにな。…（一人噛みしめるように）うちは心底信じとっとよ。キリスト様の教えのために、西坂や雲仙や大村や生月でどれだけの人が殉教したな、こないだ牢屋で死んだ帳方の吉蔵どん

…。あん人たちん流した尊か血や涙は、ぜったい無駄じゃなか、そいばちゃんと受け取って、いつか花を咲かせ、実を結ばせてくださるとが、わたしらの信じとる、ご大切の神様のなさることやろ。ずっと蒔かれた信仰の種が、もうそろそろ芽吹くときの来たって感じる。あん、フランス寺が建ち始めたときから、抑えきらんこん胸騒ぎが、そん合図にちがいなか。

―― 四幕（二場） ――

―第一場―

ナレーション⑥

こうして、浦上のキリシタンたちに、決断の時が迫られました。しかし、長い潜伏生活の中で、信仰を隠して暮らすことは伝えられても、約束の時が来て、いざ、信仰を表すすべは教わってはいませんでした。だから、あのときみんなうろたえたのです。踏絵、寺請け、宗門改め、２５０年もの沈黙の時が、キリシタンたちを引きこもらせ、臆病にしていたことは確かでした。

そんな浦上で、浜口の産婆、杉本ゆりは、だれが何と言おうと、今度ばかりは心に期するものがありました。何がそうさせたのかわかりません。ゆりは、あの殉教者たちが信じていた神様と、ずっと禁教令の中で自分たちを守ってきてくれた神様が、オナジだということを、誰かに伝えたい気持ちでいっぱいになっていたのです。

その晩、ゆりはこれまでいつくしんで来たものを、一つ一つなぞるように、家族といとまごいをしました。３月 10 日の夜のことでした。

ナレーションが終わると紗幕が上がり、ゆりの家の中に照明が入る。

ゆりの家　夜中

登場人物

- **徳造　３５才**
- **ゆりの娘シゲ　３３才**
- **マキ　７才**

・ ゆり　５０才

ゆりの家　３月17日前夜

ゆり、衣装箱から着物を出してたたんでいる

娘シゲ、下手より子供一人連れて登場

子供（マキ)、ちょうちんを下げている

マキ　おっかぁ、なして今日もおババのうちに行くと？

シゲ　何かしらん、おババがね、マキに会いとうして堪(たま)らんとげな。

マキ　ふぅん。

シゲ　（マキに耳打ちしながら）ほら、こっちから、太か声で呼んでみんね。

マキ　おババァ、おババァ、来たよ。

シゲとマキは戸を開け、提灯の火を消して、部屋に入る

ゆり　　あらぁ、マキ、来てくれたとね。いっとき見らんうちに、こげんふとうなって。

マキ　　こんばんは。

ゆり　　はい、こんばんは。いっとき見らんうちに、こげん大きゆうなって。

ゆり、マキを抱いて、部屋へ

シゲ　　なんば、ようっとね。昨日、来たばっかりやかね。

ゆり　　あ、そげんじゃったか。年ばとったら、物忘れんひどうなって。

シゲ　　年、年って、まだ五十になったばかりじゃなかね。

ゆり　　座らんね。今、お茶ば出すけん。

シゲ　　お茶なら、今、飲んできたけんよか。

ゆり　　あっ、菓子のあった。昨日、祝言（しゅうげん）でもろうた菓子のあった。マキ、ほら食べんね。（立って、茶棚から取り出す）ちゃんと食前の祈りばして食ぶっとよ。

マキ　　（とくいげに）うち、知っとるよ。おっかあから習ろうて、ご飯のときは、いつも祈ってるもん。

ゆり　　どら、してみらんね。

マキ、十字架のしるしをして「食前の祈り」を唱える

マキ　主ねがわくば、われらを祝し、また主のおんめぐみによりて、われらの食せんとする、このたまものを祝したまえ。われらの主ゼズス・キリストによって。あめん。

ゆり　よか、よか。それでよか。

マキ、菓子を食べ始める

ゆり　あんなぁシゲ、前にも言うたかもしれんばって、人間はな、いざというとき特別なことはなぁも出来んもんたい。日頃からしてきたことだけが最後には力になっとよ。だから、毎日の祈りばかかすなぞ。そしたら、マキも神さまが示された道を歩く人になれる。

シゲ　マキは、このごろ神さまばご大切にするって、『どちりなきりしたん』の「慈悲の七つの所作」も覚えとっとよ。マキ、ほらっ、言うてきかんせんね。

マキ　一つには、飢えたるものに、食をあたうること。二つには、渇（かつ）したるものに、飲み物を飲ますること。三つには、肌をかくしかねたるものに、衣類をあたうること。四つには、病人をいたわり見舞うこと。五つには、行脚（あんぎゃ）のものに、宿をかすこと。六つには、囚（とら）われの身をうくること。七つには、人の死骸（しがい）をおさむること。これなり。（マキ、母を見な

がらうなずいて）　はぁ、言えたあ。

ゆり　（涙を拭いながら）あぁ、マキはほんによか子。まだ七歳っていうとに、先祖たちからの大切な教えば、もう諳(そら)んじることができて。マキ、忘るんなぞ。いま覚えたことば、ちっとずつでよかけん生きろ。それば、生きた人が、神様ば信じとる本当の信者じゃけんね。マキもおババとオナジ信仰ばもって、あぁ、これで安心した。シゲ、これからもドチリナの教えん稽古ば、子どもたちに、忘れんごとせんばぞ。そればやめたら、信仰はおしまいぞ。

シゲ　（着物に目を移し）母さん、何ばしよっとね。夜中っちゅうとに。

ゆり　出してみたったい。これは母さんが嫁に来るときに持って来た着物たい。えっとそでも通しとらんけん、さらもんたい。シゲ、おまえ、持っていけ。

マキ、衣装のところへ行き、のぞき込む

シゲ　（けげんな顔をして）うちはいらん、そげん、派手か着もんば来て、こん歳でどこばさらくとね。

ゆり　そげん言わんちゃ。

マキ　（もう一枚取り出して）あっ、こん、小(ち)さか着もんはだれんと？

ゆり　ありゃ懐かしかぁ。（シゲに向かって）お前がこまか時、着たったい。こん着もんば来て、水方ん又市しゃんに洗礼ば授けてもろうたとよ。覚えとるな？

シゲ　（ますますけげんそうに）そげん、こまか時んことば覚えとんもんね。

ゆり　そいもそうたいな。もう、ずいぶん時間のたったもんな。

マキ、菓子を手に取り、ゆりのひざに座る

シゲ　今夜ん母さんは、なんかおかしかぁ。夜中っちゅうとに、急にマキに会いたかって言うてみたり、着もんば持っていけって言うたり、まっで、死に別れんごとあったいな。

ゆり　死に別れなぁ、そうたい、人間いつ死ぬか分からんもんな。

シゲ　こんげん夜中に、縁起でもなか。やめてくれんね。さあ、マキにも会うたけんもうよかろ。ほかに用のなかとなら、もう帰って休むけん。

マキ　（不満そうに）えぇぇ。もう帰ると、おっかあ？

ゆり　今、来たばっかりじゃなかね。もうちっと、ゆっくりしていかんね。ねぇ、マキ、菓子はおいしかか？

マキ　うん、うまかあ！

マキ、食べながら、こっくりうなずく

徳造、傘をたたみながら、玄関を開けて入ってくる

徳造　おらすとのぅ。

マキ　あっ、おっとう！

マキ、徳造の側に駆け寄る

ゆり　あらぁ、徳しゃんじゃなかね。

徳造　雨のパラパラして来たけん。迎えにきたったい。

ゆり　そうな。野良仕事できつかとに、わざわざ迎えにきてくれたっな。酒はなかばってん、菓子のあるぅ。シゲ、茶ばわかしとったけん、持ってきてくれんな。

シゲ、奥に行く。マキは徳造のひざに座る。

徳造　（徳造、着物を見て）何ごつな、また、夜中に着もんどん広げて。

ゆり　一人おれば、なぁもすっこつのなかけん、広げてみよっとたい。徳しゃんにも、いろいろ世話なったな。

徳造　おババ、何ばようらすとの、まっで死んかかった人間の言いそうなことば、そんげんピンピンしとって。

シゲ　（盆を持って入ってきながら）ね、おかしかろ。今夜ん母さん、少し変なかとよ。さあ、お前にこればやる、さあ、お世話になったって、さっきからおかしかことばっかり、言うて。

徳造　おまえが優しうせんけん、おババも淋しかったい。たまには呼んで、飯なっとくわしゅうごとせんば…。

ゆり　めっそうもなか。お前どんがようしてくるっけん、うちは少しも淋しゅうなか。ほんに良か婿どんに恵まれて、シゲも幸せたい。

徳造　そんなら良かばってん。なんかあった時は、何時でん言うてくれんのぅ。忙しかことば言えばきりんなかとけん。

ゆり　おおきに、おおきに。そげん優しかことば言うてくれて。（顔をそむけ、涙ぐむ）

そんなら、あんまり遅うなってもいかんけん、マキも眠かごとしとる。早う帰って、休んでくれんね。うちも、明日、早かけん。

シゲ　明日、何かあっとな、母さん。

ゆり　（あわてて）うんにゃ、なぁもなか、なぁもなか。お前たちが早かけんて思うてさ。

三人帰ろうとする

ゆり　（三人の後ろ姿に向かって）マキ、また来んねね。父さんや、母さんの言うことば聞いて、よう祈る子になって、みんなのために役立つ人になれぞな。約束ぞ！（マキの手をとり、いつくしむように見つめる）

マキ　うん。おババ、約束するけん！

ゆり　シゲ、徳しゃんば大事にして、三人で仲良う暮らせよ。

シゲ　（びっくりして振り返る）やっぱり、今夜ん母さん、おかしか…。あぁた、先に行っとってくれんね。ひょっとしたら泊まってくっかもしれんけん。

徳造　そいがよか、そいがよか。たまには親子水入らずもよかたい…。おババ、そげんせんな。

ゆり　（あわてて）うんにゃ、うんにゃ、そげな心配、いらん。うちももう、眠とうなった。シゲがおったら眠られんけん、早う連れていってくれまっせ。

シゲ　まぁ、この母さんの、うちば子どんのごと言うて。

ゆり　親から見れば、いつまでんちゃ、子は子たい……。なんの……　今日は少し、淋しかだけたい……。ばってん、マキも見た、お前たちん顔もみたぁ。よかぁ夢ば見て、眠るたい。

シゲ　なら、よかばってん。

ゆり　おおきに、おおきに、ほんにおおきんじゃったね……。雨もふってきたし、暗かけん、用心して帰れよ。

マキ　おババ、また、来るけんね。ゆっくり休まんね！

ゆり、何も答えず、ただうなずき、三人に向かって手を合わせ、いつまでも見送る
マキの手を引いたシゲ、徳造、心を残しながら帰る
ゆり、引き戸を閉めて、ため息をつく。　徐々に暗転

暗転の中でゆりが唱える「ガラサの祈り」がながれる。「ガラサの祈り」が終わると、ゆりの家に照明が入る。早朝の情景。

―第二場―

ゆりの家　早朝

薄暗い

マリア像のみ光

ゆり、祈りをしている

外は雨

登場人物

- **ゆり**
- **多十**
- **テル**
- **八**
- **マツ**

・スミ

・サモ

・つる

婦人三人（マツ、スミ、サモ）上手より登場。玄関の戸を叩く

マツ　ゆり姉しゃん。ゆり姉しゃん。

ゆり、玄関へ行って戸を開ける

ゆり　早かったね。早よう中に入らんね。

スミ　うちん人に気付かれんごと出てくぅちゃ、大変じゃったばい。

サモ　うちもさ。夕べから着もんな牛小屋に置いたけん良かったばってん。外に出たら雨の降りよるじゃろ。

まもなく多十、テル入ってくる

テル　あんたたち、早かったね。

マツ　なんの、うったちも今、来たばっかりたい。

テル　そうなぁ。

外の三人も続いて入ってくる

多十　こいで、みんなそろうたつな。

スミ　あらっ、八しゃんが来とらんとん。

サモ　八のこったい、あてになんもんな。

マツ　ばってん、見張り役におらんば、困っとに。

八、棒を持って、走ってくる

八　　あぁ、おった。間に合うて良かった。俺いは、てっきり、うっちょかれたと思うて、走ってきたとばい。

テル　　（棒を見て）また、そげんもんば持って来て。いらんて言うたろうが。

八　　あぁ、そうやった、これは「うっかり八兵衛」でござった。殉教に行くとやったね。

ゆり　　八しゃんな良かね、いつでんそん気にならるっけん。うちは信仰のなかとやろね。なーんかまだ、心残りんしてさあ……。

多十　　姉しゃん、だいでん一緒たい。ばってん、こいは、何時か、誰かがせにゃならんこったい。神様からの約束の日がきたと、その約束が叶える手伝いに、俺（おい）たちが選ばれたって思わんば。

テル　　おっ、こがんところで、時間ばつぶしたら遅うなる。明るうならんうちに、早う出かくうで。

多十　　そん前に　こないだ話ばしたことば、もう一ぺん確かむっけん。姉しゃんとテルとツルは、土井からまわって、飽の浦から船で渡るとぞ。おいとマツ、スミ、サモは大坪から、穴（あな）弘法（こうぼう）ば越えていくけん。ほかんもんな浜口に出て、井樋（いび）の口から行ってくれんね。それから、もう一つ大切なことば言うぞ。大浦に着いたら、お奉行様の中間（ちゅうげん）ばしとる与作さんが先に行って待っとる。

テル　　（驚いて）えっ、そん人間は、信用できる人ね！。

多十　　あん若者はな、本当は五島のキリシタンたい。五島もんも、首ばなごーして知らせば待っとる。そ

いけん、与作さんも一緒に確かめに行くごとなった。よかな。こいは、命がけぞ（一同、顔を見合わせて、深くうなずく）。

ゆり　　そんなら、みんな。サンタマリアのご加護ば願ごうて、祈りばしゅうで。

納戸のマリア観音の前で「ガラサの祈り」を唱え始めると、次々に組別に出ていく。婦人たち、多　　十の順に。やがて祈りの声を少しずつ消す

最後の組が立ち去ると、暗転となり紗幕が下りて、ナレーションと映像が入る。

―― 五　幕（二場）――

―第一場―　　天主堂への道

登場人物

・マツ

・多十

・スミ

・サモ

・安太郎

・久米八

・佐助

・つる

・テル

・ゆり

ナレーション⑦

大坪から穴弘法（こうぼう）を上る山越えの道、

浜口を通って井樋の口に出る街道ぞいの道、

そして、土井を通って、飽の浦で船に乗る海の道、

キリシタンたちの２５０年もの夜道の最後の道程は、この３つの道を通って始まりました。

ナレーションが終わると紗幕が上がり、合流する舞台に照明入る。

マツ　　ゆりしゃんたちは遅かね。

多十　こん時化じゃもん遅れてん仕方なか。ばってん、こん大雨んおかげで、役人がおらんたぁ助かるぅ。

スミ　（上手を指差し）あれぇ、だいかしらん。向こうから三人走って来よるばい。

サモ　役人とは違うごとあるとん、だいじゃろか。

走る足音近づき、やがて、息を切らして一本木の男達３人、上手より

安太郎　おったぞ、おったぞ。

久米八　間におうて、良かったばい。

多十　これはまた、一本木のあんしゃんたちじゃなかな。役人でもなかとに、人ん後ばつけて、何んばしに来たとな。

サモ　役人に密告ばしに来たとやろ。すんなら、してもよか。うったちゃ、覚悟ばして来たとやけん、何ぁも恐ろしかもんな、なかぁ。

佐助　そげなこつ、おいどんも信心なえっとせんばってん、浦上の信者のはしくれたい。

いくらなんでん、そげなむげらしかことばするもんね…。

安太郎　村じゃ、お前さんたちん、おらんちゅうて、う一騒動ばよ。

久米八　そいで、こん前ん話のあった後じゃけん、ひょっとしたらって思うて、こうして、息せき切って走

って来たとやかね。

スミ　そいで、うったちに、どげんせろって言うとな。

佐助　そげん、けんか腰になられたら話のされんたいね。こん間、俺いたちも、荒かものば言うて、すまんじゃった。そんこつもあったけん。どっち、転んでん、信者同志。けんか別れは良うなかけん、とにかく心配してきてみたったい。

久米八　多十あんしゃん、目上あんしゃんに、あげなこつば言うて、あんときは、ちいっとばっか酒んはいっとったもんじゃけん、酒ん言わせたと思うて、許してくれまっせ。

多十　そうのう、そいばわざわざ言いに来たったい。気にするこつはなか。立場ん違えば、思うこつも違う。お互いさまたい。

マツ　こん大事か前に、そげんこつは、もう、どうでんよかとよ。うったちは、あんときん言葉はもう忘れてしもうた。用の済んだら、早よう帰らんね。こんげんところば役人に見られたら、それこそ、大ごとすっとよ。

佐助　走ってきた一番の用は、もう覚悟したっていうたけど、どげんじゃろうか、多十あんしゃん、もういっぺん考え直すわけにゃいかんとやろうか。

多十　（きっぱりと）そいは出来ん、だいがどう言うたっちゃ、そいはできん。子どんがのんきに遊びじゃなかとよ、女だてらに、みんな命ばかけて来とっとよ。ばってん、意地で来たとじゃなか。先祖代々の願いば果たしに来とっと。ありったけの信仰ば振り絞ってここまで、たどり着いたとぞ、なあ佐助どん。いざとなれば、人には譲れんもんのあっとよ。いまが、そん時たい。

ゆりたち、三人、上手よりはいってくる

つる　あぁ、多十しゃん。う、うちはもう死んかって思うた。船頭さんの何回も引っ返すって言うたとばってん、拝み倒して、連れてきてもろうたとよ。

サモ　きつかったね。うったちも、さっき来たばっかりたい。

テル　こいで、みんなそろうたとね。（言いながら、３人の男に気付く）あれぇ、あんたたち、こん前ん……。

安太郎　あん時は、ほんにすまんこつで、今、みんなに詫びばしたとたいね。ゆり姉しゃん、勘弁してくれまっせ。

スミ　それは、もう、良かって、ようるたいね。早よう帰らんね。

佐助　（ゆりに向かって）今、多十あんしゃんにも願うてみたとばってん、どげんじゃろうか、思いとど

まってもらえんじゃろうか。

ゆり　そいは、お前どんの意見な、そいとも、村んもんの意見な。

久米八　そいは……。

佐助　（久米八の口を押さえて）もう良かたい。何ぁも言うな。ゆり姉しゃん、ことの次第ば言えば長ごうなっけん、言わんばってん、おいたちはな、水方ん　又市おんしゃんの使いで来たとよ。又市おんしゃんの言うにはな、一応、止まるもんなら、止めてみろ。ばってん決心の動かんときには、しかたなか、お前たちも一緒におって加勢ばせろって。役人の見張りぐらいはでくっじゃろって、言われて来たったい。

ゆり　そうのう、心配ばしてくれとっとたいね。ばってん不思議なもんよなぁ。お前さんたちが怒鳴り込んで来た時まで、だぁいも、そこまでは考えとらんやった。そいどころか、多十しゃんな、そげんこつは男衆に任せておけって、反対ばしとったとよ。ばってん、お前どんに、あげなこつば言われたもんけん、自分でも思うてもおらんじゃったことば言うてしもうたとげなよ。やっぱり、神様は最後はいちばんよかごとしてくださる。うったちの考えの及ばんことば、ちゃーんと計画なさっておらすと。

多十　そうよのう、わしにも分からん。あん時、何か後ろから太か力で押されたごつある。今になって思

えば、みんな神さまの仕掛けたことたい。

ゆり　　神様は、時々、人間の弱さば逆手に取って、良かごと導いてくださるって言うけんね。お前どんがここに来たとも、ちゃあーんと計画にはいっとっとぞ。さあ、ぐずぐずしとられん、一緒に行こうで……。

徐々に暗転となり、ナレーションと映像が始まる。

ナレーション⑧

いくつもの夜をかいくぐってきた人たちは、人がどんなにうろたえても、最後には神がすべてを整えてくださることを、身に染みて知っていました。この時のゆりやテルたちもオナジでした。その力がどこから湧いてくるのか、自分たちにもわかりませんでした。そして、いよいよ神が用意された復活の時に向かって、真っすぐ出向いて行ったのです。ゆりたちは、口にこそ出しませんでしたが、かつて神を頼りに生きた残りの者たちと同じ祈りを唱えていました。

「神よ、私どもを顧み、あなたの子らを力づけてください。夜明けを待ちわびる人を、あなたのいつくしみで満たし、生涯、喜びの歌を歌わせてください。私どもの苦しみの日々と、苦難に遭わされた年月（としつき）を想い起し、約束された喜びを叶えてください。」

ナレーションが終わると紗幕が上がり、天主堂内に照明が入る。

―第二場―　　天主堂内

無原罪のサンタマリア像、左端上に、暗くして安置

登場人物

- **一場に登場の全員**
- **与作**
- **プチジャン神父**
- **ロカーニュ神父**

プチジャン神父、祭壇の前で祈っている

ロカーニュ神父、上手より入ってくる

ロカーニュ　今朝は、あんなに雨が降っていたのに、今は晴れ渡って、今日は何か良いことあるかもしれない。それにしても、日本の天気は急に寒くなったり、暑くなったりと、ほんとうに変わりやすい。

あっ、神父さま、やはりこちらでしたか。ほんとうに、神父様はよくお祈りなさる。

プチジャン　（立ち上がりながら）いいえ、弱いから祈るんです。焦っているのでしょうか、このごろ何か妙な胸騒ぎがして。私たちパリ外国宣教会が、ローマから日本の再宣教を命じられてからもう 34 年になります。そして、フォルカード神父様が琉球に入ったのが 27 年前です。琉球にきたアドネ神父様はそこで亡くなりました。私たち宣教師は、オナジ思いでずっと準備してきました。でも、ほんとにオナジ信仰をもったキリシタンが、この国にまだ生きているのか思うと、ふっと意識が飛ぶのです。

ロカーニュ　近頃の神父様がぼんやりしているのはそのせいですか。いや、これは失礼しました。それにしても、一晩中降り続いた雨が、今朝になったら、すっかり上がって、天が透けて見えるくらいの青空です。

プチジャン　春の陽気に誘われて、今日もまた見物人が来るのでしょうね。

ロカーニュ　神父様、雨の日もそうですが、この頃、役人の監視が厳しくなっています。私たちが、日本人をキリスト者にするのは禁じられています。そのこと警戒しているんでしょう。ですから、見物人が来た時だけ開けて、あとは出来るだけ扉はしめておきましょう。

プチジャン　いいえ、天主堂はあの人々のために建てられたのです。いまは建物が珍しくて見物に来ていますが、それでもいいのです。ここに来た人たちには、神様が何かを語りかけてくださると信じています。教会は見物するところではなく、本当は、神さまと語り合う聖なるとこです。

ロカーニュ　役人があれほど監視するのは、もしかして、ここを訪ねる見物人の中に、キリシタンの子孫がいるからかもしれませんね。

プチジャン　ほんとうにそうならば、私は、その人たちを見届けてすぐに死んでもいいです。福音書のあの老人シメオンのように「私はこの目で、主の救いをみました」と、叫んでみたいです。でも、２５０年というときは、人間が希望するにはあまりにも長すぎます。

ロカーニュ　とにかく、天主堂の門扉は、用心のために閉めときますね。

暗転　一瞬静かになる

門扉を揺する音がする

影の声　この門は、押しても引いても開からんばい。まだ、閉まっとるぞ。せっかく、ここまで来たとに。

プチジャン　（音のする方をのぞき込んで）ほらっ、だれか来たようですね。私がいって、門を開けてきます。

ロカーニュ　いつもの見物人でしょう。私は用を思い出しました。案内は、神父様にお願いします。

ロカーニュ神父、下手へ

プチジャン神父、上手へ　　扉を開けて、案内してくる。

ゆり、テル、ツルの三人、忍び足で上手より登場

照明暗く、少しずつプチジャン神父に光を当てる

ゆり、テル、ツル、神父の後ろに近づく

ゆり　（声を殺して）もうし…、あのぅ…。

プチジャン　（静かに振り向く）何か、私に。

ゆり　（右の手は胸にあて、そっと、耳打ちするように）　**ワレラノムネ　アナタノムネト　オナジ。**

プチジャン　えっ、今なんと言いましたか。もう一度、はっきり言ってみてください。

ゆり　ここにおります私どもは、全部、あなたさまと同じ心でございます。

プチジャン　（驚いて、必死に平静さを保つように、両手を胸にあて）本当ですか。しかし、あなた方は、どこからおいでになりましたか。

テル　私どもはみんな、浦上の者でございます。浦上ではほとんど全部の人が、私たちと同じ心を持っております。

上手に足首

三人さっと散り、そ知らぬ顔で堂内を眺める

上手に多十たちが立っているのを見て、手招きをする

ゆり、再び、プチジャン神父のそばに行く

ゆり　ご安心ください。あの人たちもみんな浦上の者でございます。私どもと同じ心を持っています。

多十たちも近付く

多十　あなたさまは、パーデルさまでいらっしゃいますか。

プチジャン　どうして、あなたは、その言葉を。

多十　はい、親たちからの言い伝えで、知っております。七代経てば、告白を聞いてくださるパーデルさまが来ると。

プチジャン　はい、私は確かにローマのパーパさまから遣わされたパーデルです。

ツル　ビルゼンでございますか。

プチジャン　そうです、そうです。私は生涯を神様に捧げ、一生独身を守っています。これから、あなたがたが私の大事な子どもたちです。

みんな、手を取り合って、うなずき合う

ゆり　サンタマリアのご像はどこですか？

プチジャン　おぉ、サンタマリア、サンタマリーア……。聖母よ、あなたは今日まで、長い夜道を歩いて来た子どもたちを、片時も忘れず導いてくださっていたのですね。（左手でサンタマリア像を差して）ほらっ、御覧ください、あそこにいらっしゃいます。

マリア像へ光

聖母像の前に駆け寄り、口々に驚きを表す。アドリブも可

八　ほんなこつ！

テル　サンタマリアばぁい！

多十　あぁ、ここにサンタマリアさまのおらした！

ゆり　御子ゼズスさまば、御腕に抱いていらっしゃる。

八　こいは、観音のマリア様じゃなか、これが、ほんもんのサンタマリア様たい。ほんもんのマリア様が、おいたちのすぐそばにおらしたとぞ（手を合わせ、跪いて、肩を震わせ、嗚咽を上げ始める）

多十　待った甲斐があった。待った甲斐があったぞ！テルぅ、ゆり姉しゃん、パーデルさまがおいでなすったとぞ。あん、約束は嘘じゃなかったとぞ。（号泣）

テル　うったちが苦しかったときも、疑ってみんなの心が壊れそうなときも、いつもサンタマリアがいてくださったとたい。今日まで、知らんじゃった。

プチジャン　主よ、主よ、教えてください。あなたのいと小さき僕、ベルナール・プチジャン、私はいまこの目であなたの壮大な救いを目の当たりにしました。このなんの取り柄もない私に、この不思議なみわざを見せてくださったあなたは、いったい何ものですか。　（一呼吸おいて）生きていたのです。２５０年、あなたの愛しいこどもたちは、ずっと待ち続け、オナジ信仰を伝えて生きていたのです。あなたの母マリアが、この子どもたちを守っていてくださっていました。

佐助　パーデルさま！　わたしは大(うと)か罪ば犯したとです。お赦しばください。お赦しば…。

一同　私どももオナジです。お赦しばください。お赦しば…。

プチジャン　エゴ　テ　アブソルボ　インノミネ　パートリス　エト　フィーリーイ　エト　スピリトゥス　サンクティ　アーメン。

ゆり　（プチジャン神父の手をしっかり握り）パーデル、パーデル、（右の手を聖母マリアに差し伸べながら）サンタマリアさまー。

プチジャン　聖母よ、ごらんください。これがあなたの子どもたちです。

プチジャンの台詞の５秒後にナレーションが入る。徐々に照明がサンタマリア像だけに当てられていく。その状態でナレーションが終わるまで一同は静止している

ナレーション⑨

こうして、２５０年間、閉ざされていた沈黙の扉が開かれました。深く、長い、沈黙を生きた人たちは、曲がることも、折れることもない、オナジ信仰を携えていました。そして、サンタマリアが、そこにいました。これが、祖母杉本ヤスから伝え聞き、私が受けた信仰です。

信徒発見の３年後、浦上四番崩れが始まり、浦上の人たち約３千７百人は金澤以西 22 藩にわけられ、流されていきます。そのうち約７百人が追放先で殉教しました。水方の岩永又市さんも、あの言葉の通り津和野で殉教しました。しかし、神の約束は、必ず叶うことを目の当たりにした人たちは、流された時も、旅から帰ったあとも、オナジ思いは揺らぐことはありませんでした。口先ではなく、あの慈悲の所作をもって、孤児を養い、病人を世話し、神のご大切のオナジを黙々と生きたのです。そして、彼ら

のそばには、いつもサンタマリアがいました。

　あれから、１５０年、いろんなことがあって、時代もずいぶんと変わりました。どうしてでしょうか。人は何でも自由にできると思い始めたら、大切なものの順番を取り違えてしまうものです。親と子が、子と孫が、仲間同士が、オナジことを支えに、オナジ心で生きているのか、少し心配です。でも、今もサンタマリア様がそばにいてくださいます。大丈夫です。この信仰を手渡していきます。ありがとう。

静かに緞帳が下りる

天に在（ましま）す

てんにまします、われらが御(おん)おや　御名(みな)を、たっとまれ給え、御代(みよ)来たり給え

てんにおいて、おぼしめすままなるごとく、地においても、あらせ給え

われらが、日々の御(おん)やしないひを、今日(こんにち)われに与え給え。

われら、人にゆるし申すごとく、われらがとがを、ゆるした給え。

われらを、てんたさんに、はなし給うなかれ。

われらを、けうあく（凶悪）より、のがし給え。あめん

ガラサ

がらさみちみち玉(まも)ふまりやに、御(おん)れいを　なしたてまつる

御(み)あるじは、御(おん)みと共にまします

女人(にょにん)の中(なか)におひて、わきて御(おん)かほう（果報）いみしきなり。

また　御(おん)たいない（胎内）の御身(おんみ)にてましまし　ゼズキリストは　たっとくまします

デウスの御(おん)ははさんたまりや　いまも　われらがさいごにも

われらあくにんのために　たのみたてまつる　あめん

（『どちりいなきりしたん』１６００年長崎版）